

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は奈良盆地の北西部に位置し、矢田丘陵の南端から大和川にかけての平野部一帯を占める。飛鳥から難波へ至る経路上に位置する歴史上重要な地域であった。斑鳩町には現存しないものも含めると、約70基の古墳が存在する（図1、前園編1990）。本章では、斑鳩町内におけるおもな古墳と古墳時代の遺跡の概要を説明する。

前期の古墳 斑鳩町内で最初に築かれた古墳は駒塚古墳（2）である。法隆寺の東に位置し、主軸をほぼ南北にとる前方後円墳で、現存長49m、後円部径約34mを測る。葺石をもつが、埴輪は少量の出土であり、墳頂部のみに並べられていた可能性が高い。二重口縁壺の存在から、4世紀後半頃の築造とされる。周濠は確認されていない。埋葬施設は、後円部墳頂で墓壙掘形を確認している。掘形の規模は東西約6m、南北9.4mで、南北方向に主軸をもつ隅丸方形と推定される（荒木2007、2011）。

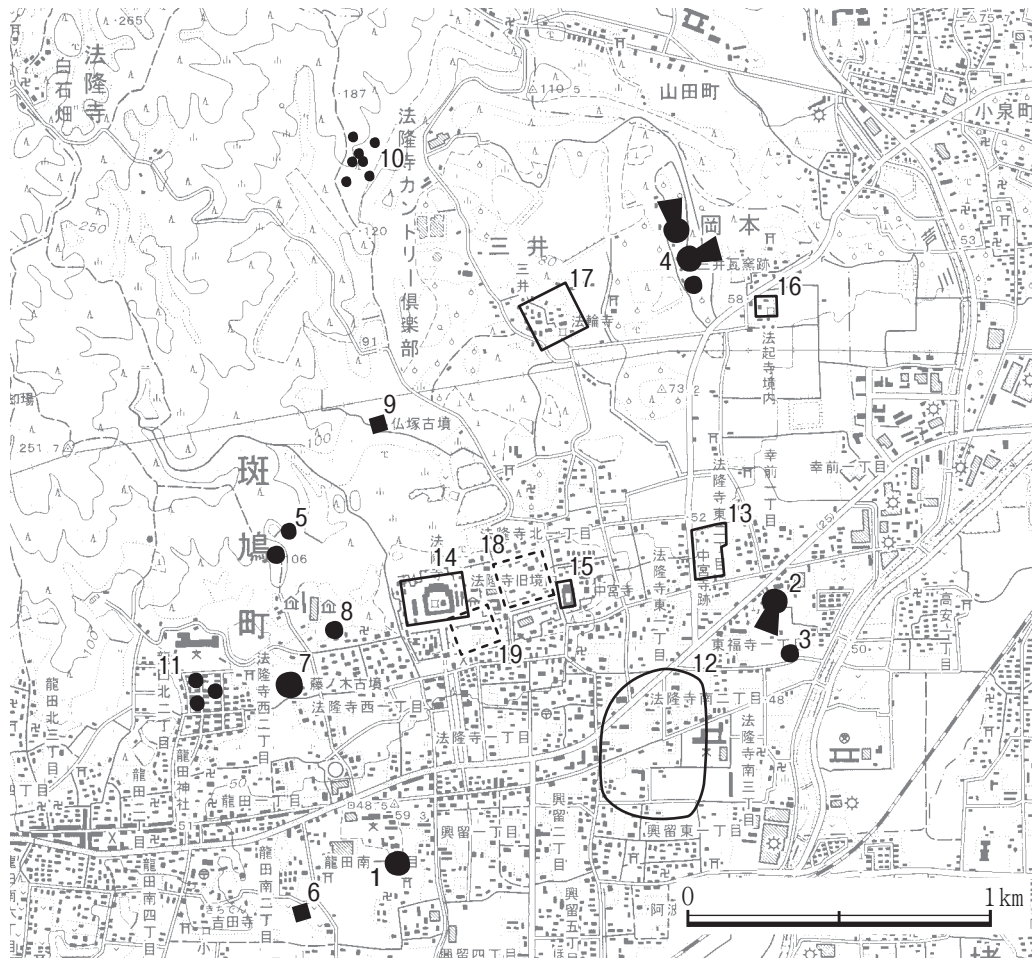
中期の古墳 調子丸古墳（3）は、駒塚古墳の南約100mに位置する円墳である。古墳は大きく裾を削られ規模を明確にできないが、径14m程度と想定される。2002年度の周辺の調査で周溝らしき溝を確認し、中期の埴輪片が出土した（平田2011）。駒塚古墳と調子丸古墳は墳形が異なるが、平地に近接して築かれており、密接な関連性をもって造営されたと考えられる。

瓦塚古墳群（4）は大和郡山市との境に近い法起寺の北西約100mに位置し、前方後円墳2基と円墳1基で構成される。1号墳と2号墳は尾根上に後円部が接する。1号墳は墳長約97mの前方後円墳で、後円部径約60m、前方部幅約47mを測る。埴輪と葺石が確認されている。埴輪列は上下2段に及び、円筒埴輪と朝顔形埴輪が存在する。さらに、前方部下段には壺形埴輪、後円部東側には家形埴輪や鳥形埴輪の存在が確認された。くびれ部では、魚形、円盤形などの土製品も出土した。2号墳は墳丘の一部が畑や道路に改変され、遺存状態は良くないが、墳長約95m、後円部径約60m、前方部幅約45mと推定される。開墾中に円筒埴輪が出土している。3号墳は直径40m前後の円墳と考えられるが、道路によって一部が削平され、詳細は明らかではない（関川編1976）。

1号墳と2号墳の埴輪は製作技法が酷似し、ともに中期前半の築造と想定されるが、1号墳が尾根筋の最高所に立地することから、先行するとみられる。大型前方後円墳2基と中型円墳1基からなる瓦塚古墳群は、周辺で屈指の古墳群といえる。

戸垣山古墳（6）は斑鳩大塚古墳の西約300mに位置し、測量調査によって一辺約20mの方墳と判明した（中井1975）。また、2011年度の古墳西側における立会調査で、中期後半頃の埴輪片が出土した（荒木2014）。周辺の水田中には削平された古墳の痕跡があり、古墳群を形成していたと考えられる。

このほか、藤ノ木古墳北方の尾根上にある寺山古墳群（5）も古相の群集墳の可能性もある。寺山古墳群は1号墳と2号墳で構成され、さらに周辺にも古墳状の高まりがある。2014年に奈良



国土地理院発行 2万5千分の1地形図「信貴山」を使用

- 1 斑鳩大塚古墳 2 駒塚古墳 3 調子丸古墳 4 瓦塚古墳群 5 寺山古墳群 6 戸垣山古墳
 7 藤ノ木古墳 8 春日古墳 9 仏塚古墳 10 三井古墳群 11 御坊山古墳群 12 酒ノ免遺跡
 13 中宮寺跡 14 法隆寺西院 15 法隆寺東院 16 法起寺 17 法輪寺 18 斑鳩宮跡
 19 法隆寺若草伽藍跡

図1 周辺の遺跡分布図 1:25,000

大学が測量調査をおこない、1号墳は前方後円墳か円墳、2号墳は円墳である可能性が高まった（河村・高左右・豊島2015）。なお、本書で報告する斑鳩大塚古墳（1）も中期古墳であるが、その概要は次章で詳しく述べる。

後期の古墳 斑鳩町最大の後期古墳が藤ノ木古墳（7）である。法隆寺の西約350mに位置し、直径50m以上、高さ約9mの円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、全長約13.9m、玄室の長さ約6m。石室内には未盗掘の家形石棺が安置されていた。出土遺物には馬具、挂甲、鉄鎌、玉類、鉄製農工具、鉄刀、胡録金具、須恵器、土師器などがある（勝部ほか編1990、前園ほか編1995）。特筆すべき遺物は馬具である。金銅製馬具が1組、鉄地金銅張の馬具が2組出土し、轡、鏡板、鞍金具、歩揺付辻金具、杏葉、障泥金具、鐙などがそろっている。鞍金具には、竜や鳳凰、象などが描かれ、後輪の中央には鬼神像を浮き彫りにした金銅板が取り付けられている。これらの馬具は、東アジア規模の交流を物語る遺物である。

もう一つの有力な後期古墳と目される春日古墳（8）は、藤ノ木古墳の北東150mに位置する。

墳丘の裾は削られているが、直径30m以上の円墳と推定される。墳丘南側斜面には石室の一部と思われる石材が露出している（平田2013）。

仏塚古墳（9）は法隆寺背後の広い谷の中央に位置する方墳である。発掘調査の結果、墳丘は一辺23mで、周溝が巡ることが確認された。埋葬施設は横穴式石室で、長さ約9.4mを測る。玄室内には環状に排水溝が施され、鉸具、金環、刀子、須恵器、土師器が出土した。なお、石室内から仏具や仏像なども出土しており、中世には石室を堂として使用したと考えられる（河上・関川1977）。

三井古墳群（10）は瓦塚古墳群の背後の丘陵に所在する古墳群である。1975～1976年の分布調査により、9基の古墳が確認された。開発により多くの古墳が消滅したと考えられ、現在より大規模であったと推定される（久野・関川1976）。

終末期の古墳 御坊山古墳群（11）は、藤ノ木古墳の西約250mに存在する3基の古墳群である。1号墳は墳丘形態や規模は不明であるが、埋葬施設は花崗岩を用いた高さ1m、長さ2m、幅1.7mの竪穴式石室状のものであったと推定される。石室内には3体の遺体が埋葬されていた。木棺の飾り金具である金銅製鏤付六花形座金具1点、鉄釘4点が採集されている。2号墳は1号墳の北15mに位置する。横穴式石室をもち、家形石棺蓋石の破片が出土している。

最もよく内容が判明している3号墳は、2号墳の北東30mに位置する横口式石槨墳である。古墳は背後の山体と墳丘の間を溝によって区画し、直径8m、高さ2.5mの円墳と推定される。横口式石槨は3枚の花崗岩を組み立てた巨大なもので、内部に黒漆塗陶棺を安置していた。棺内からは男性成人の人骨とともに、琥珀製枕、三彩有蓋円面硯、管状ガラス製品が出土し、被葬者は上宮王家の一員と想定されている（泉森編1977）。

集落遺跡 古墳に比べて集落遺跡の調査事例は少ないが、特筆すべき遺跡として、駒塚古墳の南西に位置する酒ノ免遺跡（12）がある。これまで度重なる発掘調査が行われ、多くの掘立柱建物確認された、奈良県下有数の集落遺跡である。建物は掘立柱建物のみで構成され、5世紀末から7世紀初頭にかけて営まれたことが判明した（藤井1986）。

以上、ここまで斑鳩の古墳を概観した。多くの古墳と古代寺院、宮殿の展開する斑鳩は、古墳時代から古代への変化を考えるうえで極めて重要な地域である。（岩永祐貴）

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

斑鳩大塚古墳は、明治年間に野口龍潜によって書かれた『大和国古墳墓取調書』にすでに紹介されている（秋山編1985）。1954年に墳頂部での忠霊塔建設工事に際して銅鏡、筒形銅器、石釧、短甲などが出土し、発掘調査が行われた。墳頂部中心からやや南寄りで粘土槨の一部を検出し、短剣が出土している。また、墳頂部には別の埋葬施設が存在した可能性もある。古墳の規模は、直径約35m、高さ約4mと推測され（図2）、河原石を用いた葺石と円筒埴輪列の存在が報告されている（北野1958）。

1954年の発掘調査以降、斑鳩大塚古墳の本格的な調査は行われておらず、詳細な墳形や規模などの情報に乏しい。昨今、古墳周辺の宅地開発が進み、今後、古墳の保存・活用を行ううえで正確な情報把握は必須であった。斑鳩町と奈良大学は2007年以来、官学連携協定を結んでいる。調査は斑鳩町教育委員会が主体となり、奈良大学文学部文化財学科の協力で行われた。

2 調査の経過

測量調査 発掘調査に先立ち、測量調査と地中レーダー探査を行った。その成果についてはすでに報告したので（梅澤・清水・中村・豊島2014）、ここでは概略を述べる。

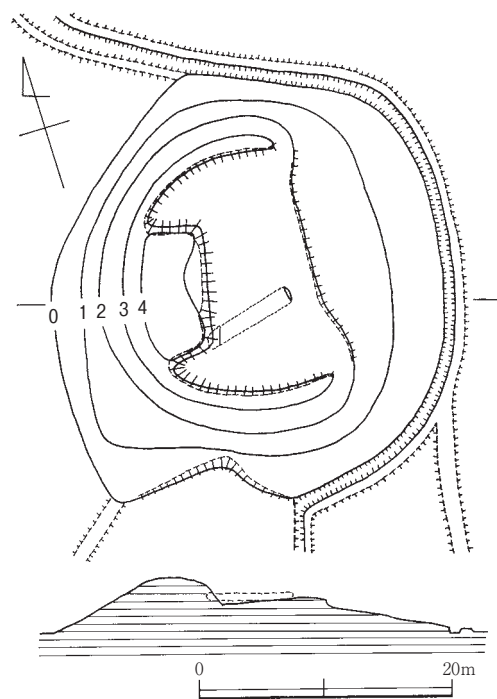


図2 1954年の墳丘測量図（北野1958）

1 : 600

測量調査は2013年8月19日から9月3日まで行った。調査の結果、墳丘の現状は忠霊塔、墓地、里道など、後世の構造物による削平を受けた様相が墳丘各所に認められた（図3）。また、以前から斑鳩大塚古墳は直径約35mの円墳と推測されてきた。しかし、墳丘東半部を巡る道路と水路が墳丘形態を反映している可能性がある。それらを本来の外形線と考えた場合、斑鳩大塚古墳は直径約40mの円墳となる。また、測量調査では墳丘周辺の地形も含めて測量図を作成した。その結果、墳丘東側の耕作地が前方部状の形を呈し、さらに前端部付近の標高が46.4mから45.4mと落差のある急斜面であることが明らかになった。東側の耕作地を前方部、現存の墳丘を後円部と仮定した場合、斑鳩大塚古墳は全長約58mの前方後円墳となる可能性があることが判明した。

地中レーダー探査 測量調査の成果を受け、2013

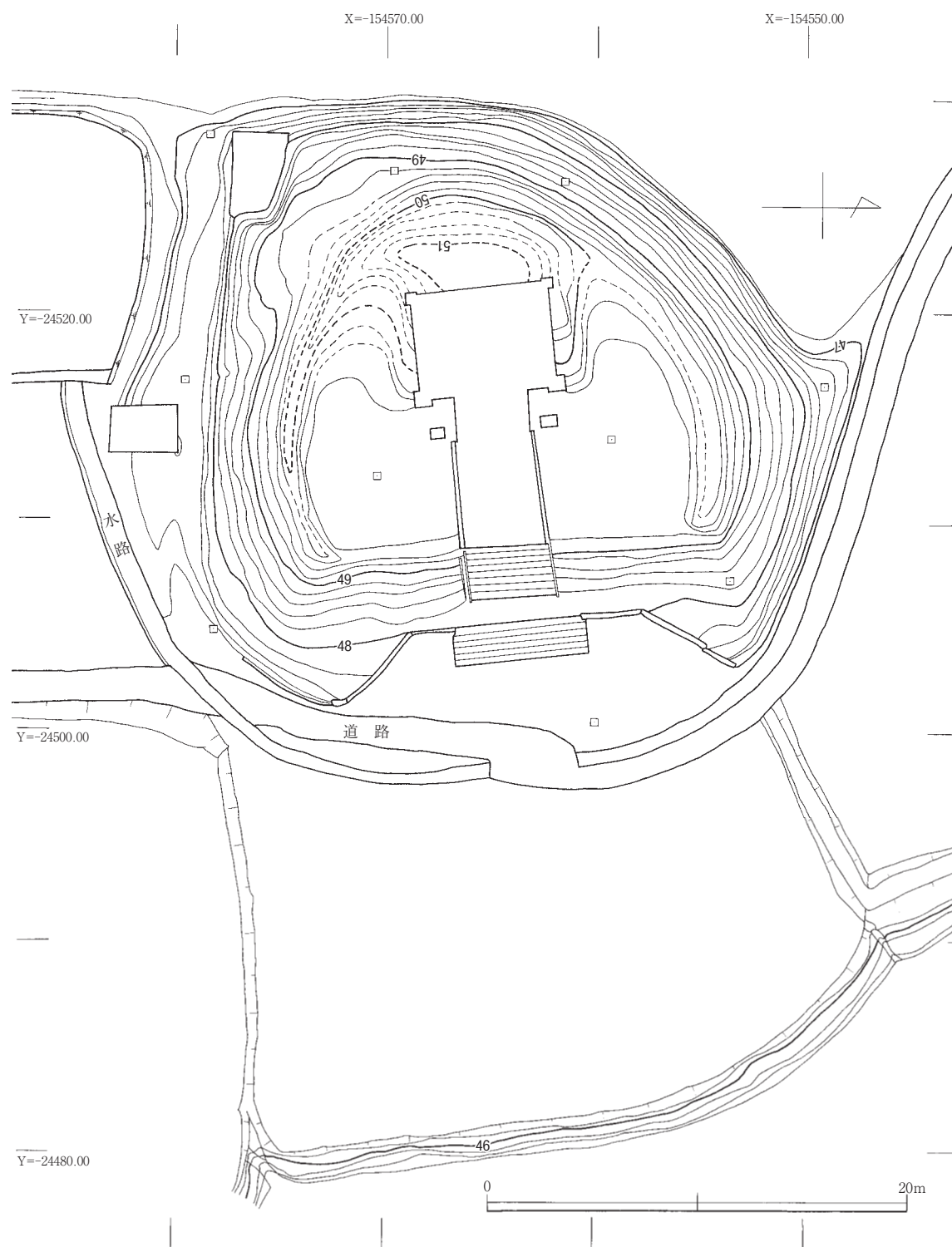


図3 墳丘測量図 1:300

年11月に奈良文化財研究所の金田明大氏、早稲田大学のナワビ矢麻氏、青笹基史氏の協力を得て、墳丘周辺の地中レーダー探査を行った。

探査の結果、墳丘西側の水田から強い反射が見られ、墳丘が良好に残存している可能性が高まった。さらに、墳丘北側の空地でやや強い反射が見られ、古墳を巡る周溝である可能性が浮上した。前方部北東隅部でも一定の反射があったものの、前方後円墳か否かは確定できなかった。



1 測量調査



2 地中レーダー探査



3 第1調査区の掘削



4 第2調査区の排水作業



5 記者発表



6 見学者への説明



7 都出比呂志先生を囲んで



8 遺物整理作業

図4 調査の様子

発掘調査の経過 以上のように、斑鳩大塚古墳の範囲は従来の想定よりも広くなる可能性が高まった。周辺では宅地開発が進行する状況であり、斑鳩町教育委員会が調査主体となり、奈良大学文学部文化財学科が協力して遺跡の範囲確認調査を行うこととなった。

発掘調査の期間は2014年3月4日から4月1日まで、雨天と日曜日等を除く合計21日間行った。調査区は遺跡の範囲確認のため、地中レーダー探査で周溝や前方部らしき反応があり、休耕地である墳丘の北側を中心に設定した。調査のおもな経過は以下のとおりである。

- 3月4日 墳丘北側に第1調査区、北東側に第2調査区を設定し、掘削作業を開始する。
- 3月6日 第2調査区の東隣に第3調査区を設定し、掘削作業を開始する。
- 3月8日 第1調査区南端より葺石の転落石と考えられる石を確認。第2調査区を完掘する。
- 3月10日 第1調査区で柱穴2基を検出する。
- 3月15日 第3調査区を完掘し、写真撮影を行う。
- 3月22日 第1調査区を完掘する。古墳の周溝らしき溝、古代の柱穴と溝を確認。
- 3月24日 調査成果の記者発表を行う。
- 3月30日 現地説明会は雨天中止となったが、見学者には個別に対応する。
- 4月1日 埋戻しと撤収作業を行い、調査の全行程が終了する。

遺物整理と報告書作成 発掘調査終了後、奈良大学文学部文化財学科において遺物整理作業および発掘調査報告書作成を実施した。また、調査成果の一部は斑鳩町文化財活用センター速報展『斑鳩の文化財展』、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2013年度発掘調査速報展『大和を掘る』、奈良大学博物館特別陳列『斑鳩大塚古墳発掘調査速報展』で公開した。

発掘調査・遺物整理参加者 今回の発掘調査および遺物整理参加者は以下のとおりである（括弧内の学年は2014年3月当時）。

豊島直博（文学部准教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、安藤真理子（大学院博士課程1回生）、梅澤あゆみ（大学院修士課程2回生）、清水早織、白石 愛（以上、大学院修士課程1回生）、河村萬里、駒田志穂（以上、文学部4回生）、小堀 僚、田中香里、間所克仁、山内菖平（以上、文学部3回生）、青木麻佑花、岩永祐貴、梅木梨沙、尾崎綾亮、柴田拓也、武井成実、土屋博史、福永一衣、三好伶佳、山浦 栞、和田健嗣、渡邊佳奈（以上、文学部2回生）、宗圓正輝、藤 謙太郎、中筋聖太、中根 佑、早川明優加、古林舞香、森田優美、山根惇史（以上、文学部1回生）、若林 繁（2014年度入学）、大澤 嶺（立命館大学文学部1回生）。

（間所克仁）

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置

第2章で述べたとおり、斑鳩大塚古墳はこれまで直径35mの円墳と考えられてきたが、2013年度に実施した測量調査と地中レーダー探査により、周溝をもつ前方後円墳である可能性が浮上した。

遺跡の範囲を確定するには、現存する墳丘周辺の発掘調査が不可欠である。周辺では現在も田畑の耕作が行われ、発掘調査は困難な状況であったが、墳丘の北側と東側には休耕地が存在した。それぞれの土地所有者の方から発掘調査の許可を得て、墳丘北側に第1調査区、北東側に第2調査区、第3調査区を設定した（図5）。以下、各調査区の成果について述べていきたい。

（豊島直博）

2 第1調査区（図6、図版1・2）

位置と目的 第1調査区は地中レーダー探査の結果から推定される周溝の確認を目的とし、現存する墳丘の北側に、南北10m、東西2mの規模で設定した。調査面積は20㎡である。

基本層序 基本層序は上から順に、暗灰色砂質土（表土。厚さ約25cm）、灰褐色砂質土（近世以降の耕作土。厚さ約40cm）、古代以降の遺物包含層である暗褐色砂質土（厚さ約30cm）となり、黄色粘質土（地山）に至る。地山上面の標高は約45.9mである。

検出遺構 第1調査区では古墳の周溝と考えられる溝SD01、古代の柱穴と溝、近世以降の耕作溝を検出した。

溝SD01は地山上面で、調査区の南端から約8mにわたって検出した。埋土は上層が灰暗褐色砂質土、中層が灰褐色砂質土、下層が灰色粗砂である。溝は南端から北端にかけて次第に浅くなり、北端では急な斜面となっている。今回の調査では一部を確認したのみだが、地中レーダー探査の成果によれば、溝は東西に続いており、墳丘を巡るものと思われる。

埋土からは埴輪をはじめとする遺物が整理箱2箱分検出された。埴輪は周溝埋土の中層に当たる灰褐色砂質土から多く出土したが、下層の灰色粗砂からは検出されなかった。このことは、周溝がある程度埋没したのち、墳丘に立てられていた埴輪が転落し始めたことを示している。出土した埴輪の多くが円形埴輪の破片である。調査区の南壁では、標高45.5m付近で転落した葺石と見られる石材を複数検出した。

古代の遺構では、複数の柱穴と東西溝を検出した。柱穴には掘形と抜取を区別できる大型のものも含まれる。根石と見られる石が残存するものもあった。これらの柱穴はその大きさから柵、または建物と考えられるが、規模や主軸方向は確定できなかった。また、上層の遺構のため図6には図示されていないが、東西溝のひとつから平安時代末頃の土師器皿（図11-5）が出土した。

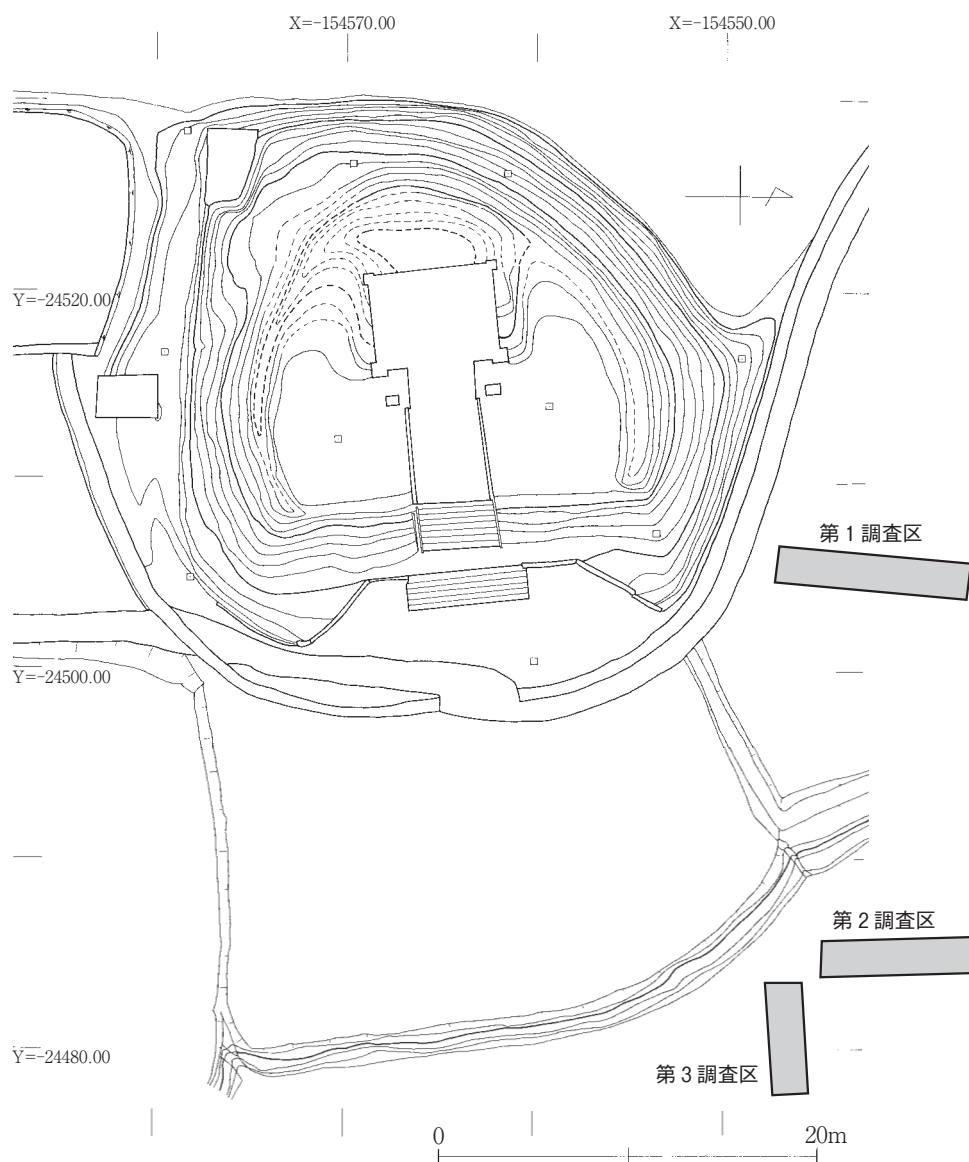


図5 調査区配置図 1 : 400

溝は柱穴に近接し、建物に伴う雨落溝とすれば、これらの年代は平安時代末頃である可能性が高い。

以上のように、第1調査区では古墳の周溝、古代の柱穴と溝を確認した。周溝は断面逆台形状を呈し、外側には葺石などは認められない。また、柱穴の一部は周溝の位置と重複する。周溝の埋没年代は出土した須恵器から7世紀前葉頃とみられるが、上層の溝から出土した土師器皿から、周辺の土地利用は周溝の埋没から遅れる11～12世紀頃に行われたと考えられる。（河村萬里）

3 第2調査区（図7、図版3-5）

位置と目的 第2調査区は前方部の有無を確認する目的で、現存する墳丘の北東に設定した調査区である。調査区は南北8m、東西2m、面積16㎡に設定した。

基本層序 基本層序は上から順に暗灰色砂質土（表土。厚さ約25cm）、灰褐色砂質土（近世以

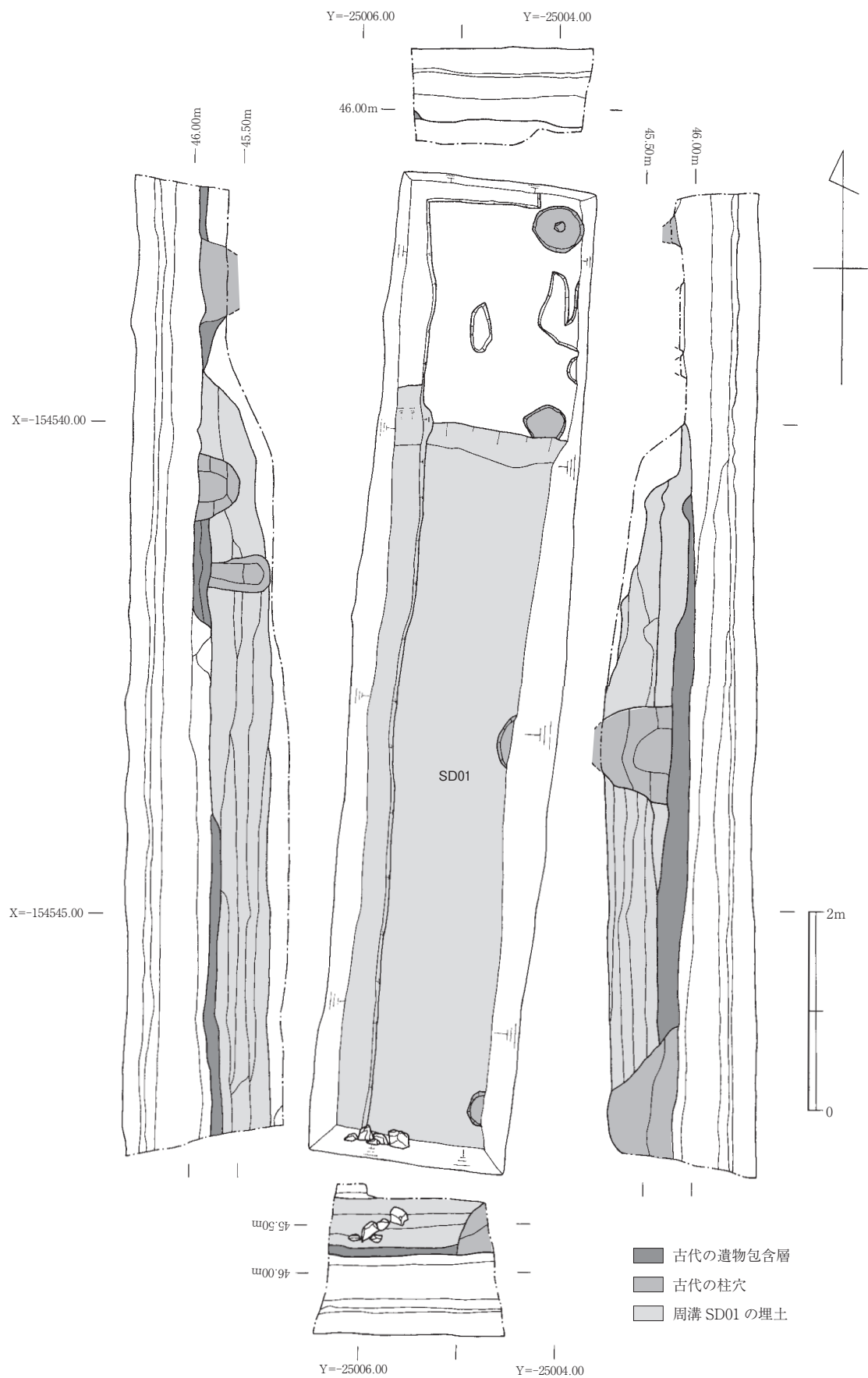


図6 第1調査区平面図・断面図 1:60

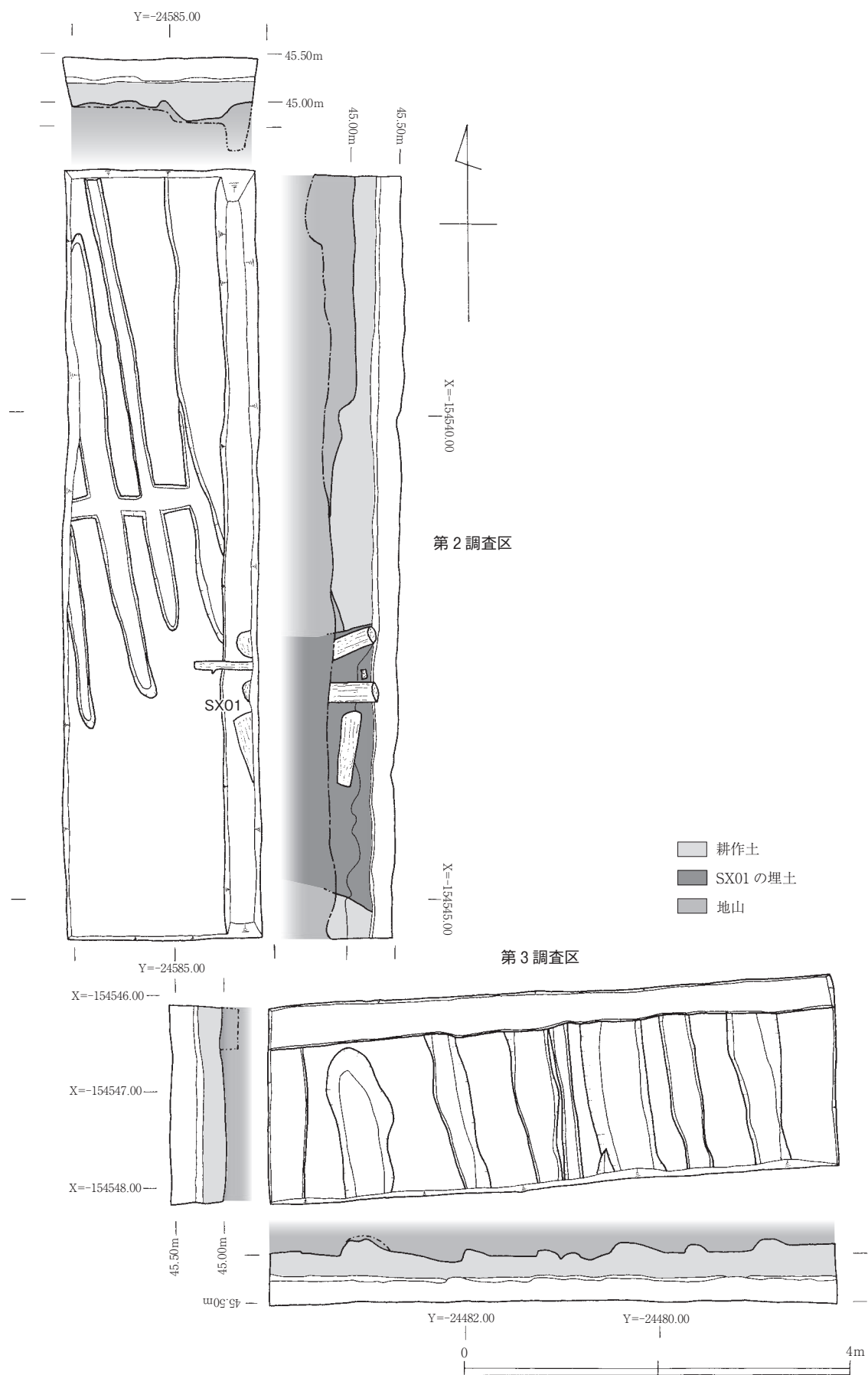


図7 第2・3調査区平面図・断面図 1:60

降の耕作土。厚さ約20cm)、黄褐色粘質土（地山）となる。地山上面の標高は約45.0mである。

検出遺構 地山上面で南北方向の素掘り溝を4条、東西方向の素掘り溝を1条検出した。溝の埋土は耕作土と同じ灰褐色砂質土のため、近世以降の耕作溝と考えられる。調査区南端から北へ約2mの位置で、南北方向の溝はすべて途切れていた。

東壁沿いの南端付近で木組みを伴う遺構SX01を検出した。SX01は黒褐色の埋土中に2本の丸太を組み、間に角柱を渡したもので、堰状の遺構と考えられる。丸太は腐朽していないため、近代以降のものである可能性が高い。第2調査区は湧水が激しく、SX01の平面形態は確認できなかった。なお、少量の須恵器、土師器、陶磁器が出土したが、すべて小破片である。

以上、第2調査区では近世以降の耕作溝や近代以降の堰状遺構を検出したが、古墳に直接関連する遺構は確認できなかった。（清水早織）

4 第3調査区（図7、図版3-6）

調査区の位置 第3調査区は、第2調査区の南東側に設定した調査区である。調査区の規模は東西6m、南北2m、面積12㎡である。

基本層序 基本層序は第2調査区と同様、上から順に暗灰色砂質土（表土。厚さ約25cm）、灰褐色砂質土（近世以降の耕作土。厚さ約20cm）、黄褐色粘質土（地山）となる。地山上面の標高は約45.0mである。

検出遺構 地山上面で7条の南北溝を検出した。いずれも耕作土と同じ灰褐色砂質土の埋土なので、近世以降の耕作溝と考えられる。溝の深さは6～20cm、幅は17～65cmで、いずれも北に対して西に約15°振れていた。古墳に直接関連する遺構は確認できなかった。遺物は土器片が少量出土したのみである。

前方部の有無 第2調査区と第3調査区では、古墳に直接関連する遺構を確認できなかった。しかし、第1調査区で検出した周溝SD01の底の標高は、最も深い部分で約45.1mで、第2・第3調査区の遺構検出面よりも高い。そのため、第2・第3調査区では古墳に関連する遺構がすべて削平されている可能性がある。ただし、第2調査区では前方部北東隅と想定される付近で耕作溝が途切れており、耕作溝が墳丘を避けて掘削された可能性がある。

以上、間接的な情報ではあるが、斑鳩大塚古墳が前方後円墳である可能性は依然として残されており、別の場所で確認する必要がある。（和田健嗣）

第4章 出土遺物

1 出土遺物の種類と量

今回の発掘調査では、3つの調査区から整理箱2箱分の遺物が出土した。内訳は埴輪が1箱、土器が1箱で、大半が第1調査区からの出土である。埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がある。土器は土師器と須恵器が多く、わずかに瓦器と陶磁器を含む。金属器は鉄器の小片が1点出土したのみである。(豊島)

2 円筒埴輪(図8・9、図版4～7)

斑鳩大塚古墳では、第1調査区を中心に整理箱1箱分の円筒埴輪片が出土した。完形に復元できるものはなく、反転復元が可能なものも少ない。しかし、透孔の形やハケ等の調整を観察できる資料が含まれる。以下、おもな個体について詳述する。

円筒埴輪 1は口縁部の破片である。大きく外反し、外面に一次調整の斜めハケを施す。2も口縁部の破片であるが、外反しない。外面に一次調整の不定方向のハケを施す。

3～5は反転復元が可能な胴部破片である。3の胴部径は30.8cmに復元される。円形透孔の一部が残存する。外面に二次調整の横ハケを施すが、ハケ原体の静止痕は観察できない。突帯上部の接合痕は横ナデで消されているが、下部の接合痕は明瞭である。4の胴部径は23.8cmに復元される。円形透孔の一部が残存する。破片上端の一部は粘土紐の接合面で割れており、接合方法は内傾接合である。突帯は上下とも接合が粗雑で、下部の粘土が円筒部器面を覆う部分もある。外面に一次調整の縦ハケを施した後、二次調整の横ハケを施す。縦ハケは突帯の上下部分にわずかに観察できる。横ハケは原体の静止痕が辛うじて認識できるもので、A種横ハケからB種横ハケへの過渡期に当たると考えられる(川西1978)。ハケ原体の幅は5cm程度である。5の胴部径は24.0cmに復元される。破片下端は粘土紐接合面で割れており、外傾接合である。突帯の接合は丁寧だが、摩滅により接合面が観察できる。表面は摩滅し、調整技法は不明。

6は底部の破片。底部径は25.6cmに復元される。低面付近の厚さは2.0cmで、器壁は上方で薄くなり、外傾しながら立ち上がる。内外面とも調整は不明である。

7～15は反転復元できない胴部の破片である。7は円形透穴の一部が残存する。突帯の大半を欠くが、円筒器面との接合部分がわずかに残存する。一次調整の縦ハケおよび二次調整の横ハケが観察できるが、横ハケの静止痕は観察できない。8は円形透穴の一部が残存する。外面に二次調整の縦ハケ、内面に斜めハケを施す。9は円形透穴の一部が残存する。外面に二次調整の横ハケ、内面に斜めハケを施す。10は円形透穴の一部が残存する。外面は摩滅し、調整は不明である。内面に斜めハケが観察できる。11は円形透穴の一部が残存する。全体に摩滅し、調整は不明である。12は下端が粘土紐接合面で割れている。外面にわずかに横ハケが認められる。13は突帯の高

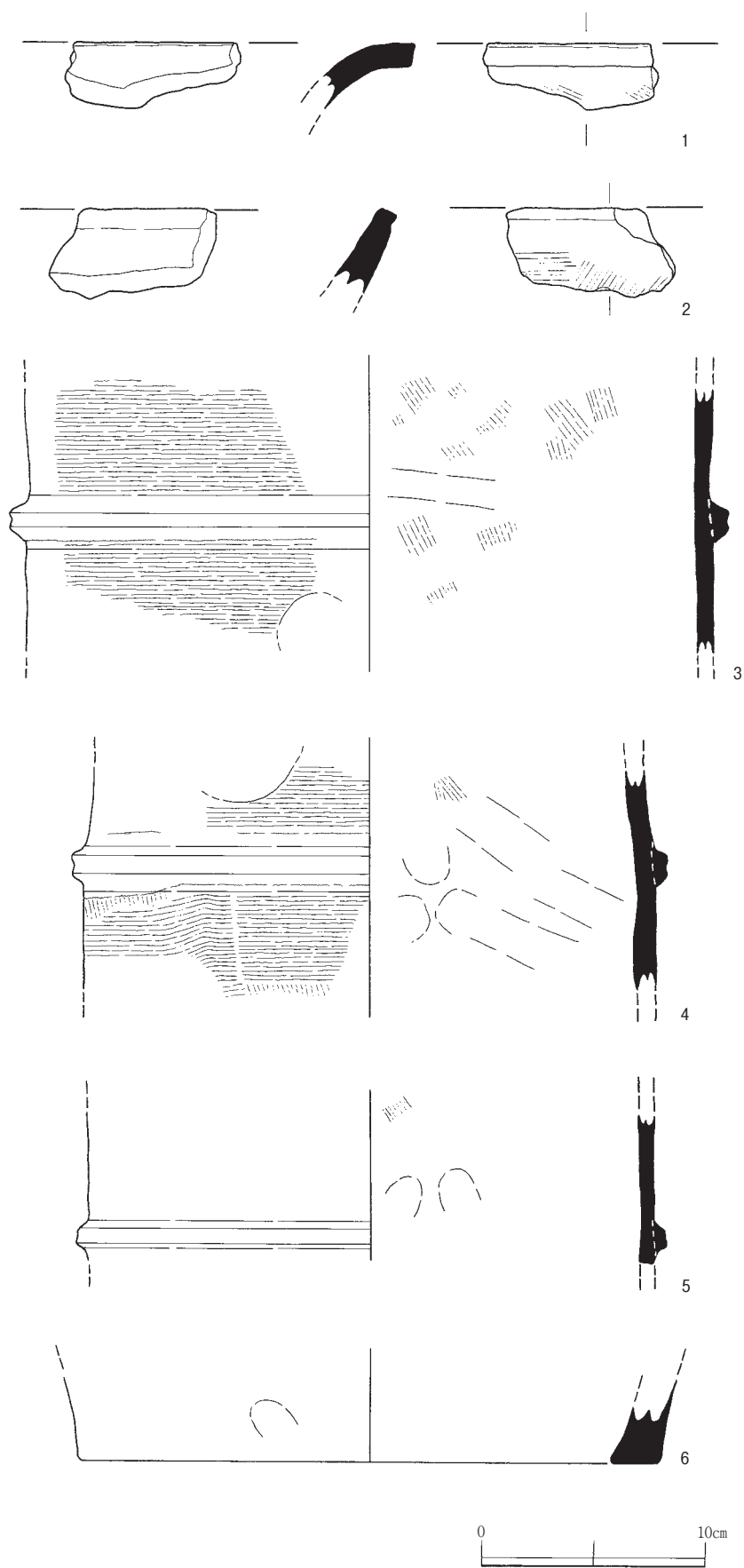


図8 円筒埴輪実測図1 1 : 3

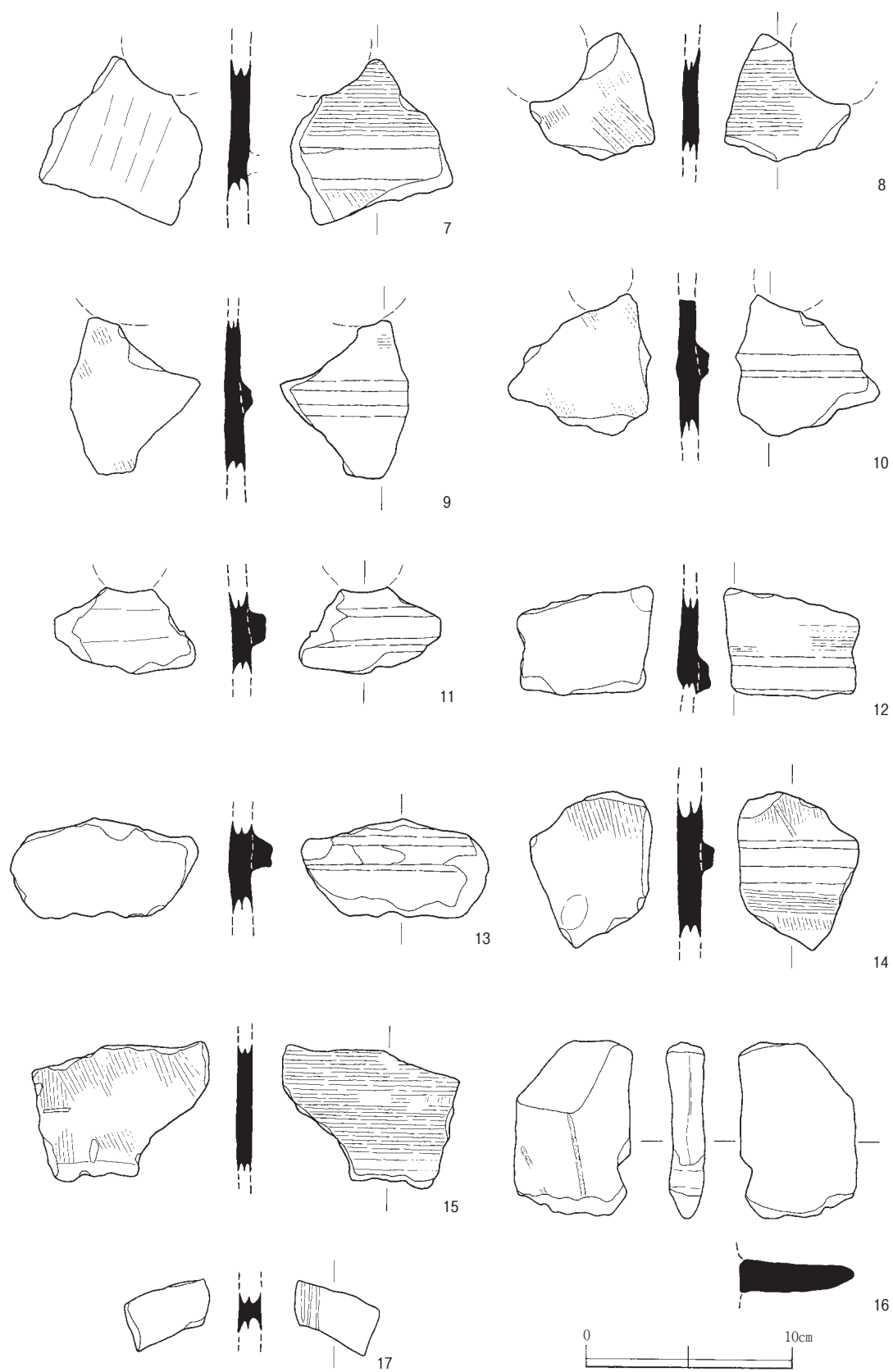


図9 円筒埴輪実測図2 1 : 3

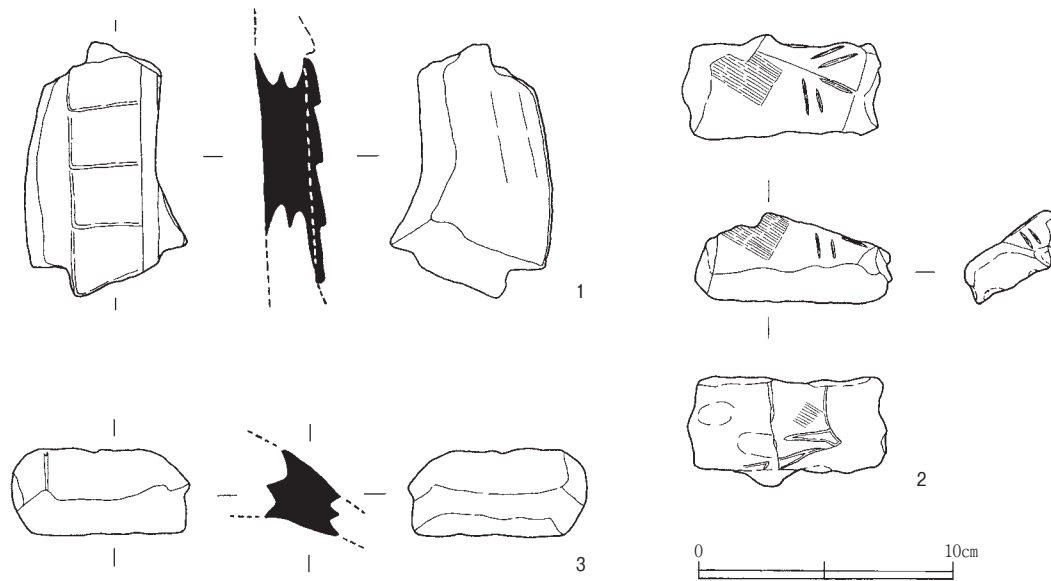


図10 形象埴輪実測図 1 : 3

さが1.0cmと高く、他の個体が0.6cm前後であるのと対照的である。全体的に摩滅し、調整は不明。14は突帯の上下端が丁寧に円筒部器面に接合されている。外面に一次調整の縦ハケと二次調整の横ハケを施すが、横ハケの静止痕は観察できない。内面には斜めハケが施される。外面全体に黒斑が認められる。15は破片下端に突帯と円筒部器面の接合部分が観察できる。外面全体に二次調整の横ハケが施されるが、ハケ原体の静止痕は観察できない。内面には縦ハケが施される。

鱗付円筒埴輪 16はヒレ部の破片。杉井健による分類の「突帯押しつぶしタイプ」に相当し（杉井1992）、17のような数条の沈線を刻むものに対応する突線が観察できる。内外面の調整は不明である。17は鱗付円筒埴輪の円筒部破片である。表面には縦方向に3条の沈線を刻む。

製作技法の特徴 出土した埴輪の胎土はすべて粗く、1mm程度の砂粒を多く含む。また、土師質で焼成は良好である。一部に黒斑が見られ、野焼きで焼成されたと考えられる。透孔はいずれも円形で、土師質焼成であること、B種横ハケの個体が含まれることから、川西編年Ⅲ期に位置づけられる（川西1978）。

最後に、製作技法と規格についてまとめたい。突帯貼付け後の調整には大きく分けて3種類あり、①上端と下端の接合痕を丁寧にナデ消し、上端と下端の断面をほぼ対象の形に仕上げるもの（5、9、11、12、14）、②上端の接合痕のみを丁寧にナデ消し、上端と下端の断面をほぼ対象の形に仕上げるもの（3、4、10）、③上端と下端の接合痕を丁寧にナデ消し、下端の円筒部器面との角度を直角に近く形成するもの（13）が認められる。また、3～6から、埴輪の口径には少なくとも大小2種類があったと推察できる。現状では、大きい口径と技法③は少数派と思われる。

以上の検討結果は、今後、工人集団や生産体制を考えるうえで有力な情報である。今後の資料の増加を待ちたい。

（柴田拓也）

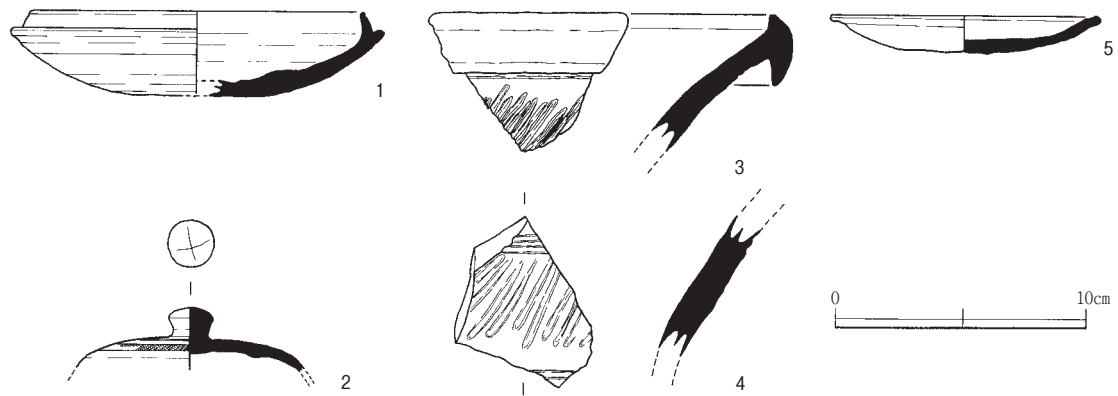


図11 土器実測図 1 : 3

3 形象埴輪（図10、図版8-1～3）

形象埴輪には鞍形埴輪、家形埴輪、蓋形埴輪があると考えられる。いずれも破片で、遺存度は良好ではない。以下に詳細を述べる。

1は鞍形埴輪の飾板の破片と考えられる。残存長10.1cm、幅6.2cm、厚さは2.3cm。外面は粘土紐貼付による立体的な方形区画帯を表現し、内面はユビナデ調整を施す。また断面には矢筒部との接合痕跡が明瞭に残る（和田2013）。胎土は粗く、砂粒が多く混じる。焼成は良好である。類例には奈良県室宮山古墳出土のP号鞍形埴輪がある（秋山・網干1959）。その年代は5世紀前半頃と考えられており（高橋1988）、従来の斑鳩大塚古墳の年代観とも相違はない。

2は家形埴輪の裾廻突帯の破片と考えられる。残存長7.8cm、幅3.6cm、厚さは1.5cmである。突帯は横に突出し、途中から斜め下方へ屈曲する、いわゆる「L字形突帯」である（前田2009）。外面には丁寧なナデ調整が施され、ハケ目も見られる。また稜上には綾杉文が線刻されている。内面には粘土による補強がなされ、ユビナデの単位も明瞭に残る。胎土は粗く、砂粒が多く混じる。焼成は良好で、黒斑が見られることから、野焼きで焼成されたことがわかる。3は蓋形埴輪の笠部と考えられる。残存長7.0cm、幅3.4cm、厚さは2.8cmである。胎土はやや粗く、少量の砂粒が混じる。焼成は良好である。表面に沈線が見られ、笠部の下部であることが分かる（小栗2007）。内外面ともに丁寧なユビナデ調整を行っている。

1～3に共通する特徴は、断面が黒色を呈する点である。円筒埴輪も同様に、同じ生産集団が製作した可能性がある。形象埴輪は、斑鳩大塚古墳では初めて確認された。墳頂部には一定量の形象埴輪が配置されていたと推測できる。これらは葬送儀礼を復元するうえで重要な手がかりであり、今後の調査で資料が増加することに期待したい。（尾崎綾亮）

4 土 器（図11、図版8-4～7）

土器は周溝と考えられる溝SD01を中心に、コンテナ1箱程度出土した。また、SD01埋没後に掘削された東西溝から、年代の手がかりとなる土師器皿が出土した。以下、おもな遺物について報告する。

須恵器 1は坏身である。復元口径13.0cmで、口縁部の立ち上がりは短く、やや内傾する。回転ヘラケズリの範囲は広い。胎土は密で焼成は良好である。色調は内外面とも青灰色で、断面はやや橙褐色を呈する。陶邑編年のTK209型式期に位置づけられる（田辺1966）。2は蓋の破片である。残存部が少なく、口径は不明。外面は列点文と沈線で飾られ、内面にはナデ調整が施されている。胎土は密で焼成は良好である。色調は外面が青灰色、内面が灰白色、断面が赤灰色である。天井部には扁平な宝珠形のつまみが付き、頂部には十字の線刻がある。本例と類似する資料が、難波宮址08-3東区の谷2・3層出土土器にあり、難波宮Ⅲ期古段階から中段階に位置付けられている（大庭編2010）。

3は甕の破片。口縁部は垂下口縁である。横方向の沈線一条と右上から左下に向けての沈線文で飾られている。焼成は良好で、胎土は密である。色調は内外面とも灰色を呈する。4は甕の頸部破片。3と同様、横方向の沈線三条と右上から左下に向けての沈線文で飾られる。焼成は良好、胎土は密である。色調は外面が黒色、内面が灰色である。

土師器 5はSD01埋没後に掘削された東西溝から出土した土師器皿である。口径10.5cmで、口縁部は強いヨコナデにより、「て」字状を呈する。口縁端部は丸くおさめる。外面は広い範囲のナデ、内面はヨコナデ調整。胎土は密で、焼成は良好。色調は茶褐色を呈する。以上の特徴は伊野近富による分類のBcタイプ（11世紀末～12世紀初頭）に相当する（伊野1995）。

以上、今回の調査で出土した主要な土器について報告した。須恵器は坏身、坏蓋、甕とも、ほぼ同時期と考えられ、SD01の埋没年代はTK209型式期（7世紀前葉頃）と推測できる。また、SD01埋没後の東西溝で出土した土師器皿の年代観から、11世紀末から12世紀初頭頃には周辺の土地利用がなされたと推測できる。（梅木梨沙）

第5章 総 括

斑鳩大塚古墳は1954年の忠霊塔建設に伴う発掘調査以来、新たな調査が行われなかったため、墳丘や周溝など外表施設に関する情報が不足していた。今回の調査は実に60年ぶりの調査であり、詳細な測量、地中レーダー探査、発掘調査など、新旧の方法を駆使して実態の解明を試みた。以下に調査の成果を総括したい。

墳形と規模 斑鳩大塚古墳は従来、直径35mの円墳と理解されてきた（北野1958）。しかし、現存する墳丘は西側、南側が大きく削平を受け、周囲の耕作地まで本来の墳丘が広がる可能性が予測された。測量調査によれば墳丘の北、東、南を巡る用水路と道路が整った半円形を呈し、それが本来の墳端を反映するならば、直径約40mの円墳に復元される。さらに、墳丘東側の耕作地の輪郭が前方部の形態を呈し、前方後円墳の可能性が浮上した（梅澤・清水・中村・豊島2014）。

測量調査の成果を受けて実施した地中レーダー探査では、墳丘西側の水田下に墳丘裾部が良好に遺存すること、墳丘の周囲に幅10m程度の周溝が巡ることが判明した。今回の発掘調査は、周溝と前方部の有無を確定するために実施したものである。調査の結果、第1調査区で幅約8m以上、深さ0.8mの周溝と思われる溝SD01を確認した。

いっぽう、前方部北東隅付近を想定して設定した第2調査区、第3調査区では、前方部の盛土や周溝は確認できなかった。しかし、この成果はただちに斑鳩大塚古墳が円墳であることを決定づけるものではない。第2調査区では、前方部の想定位置付近で近世の耕作溝が途切れており、それが墳丘を避けた結果と見れば、消極的ながらも前方後円墳の可能性を示唆している。仮に前方後円墳であった場合、墳丘の全長は約58m、周溝を含めた後円部の南北幅は約56mとなり、前代の首長墳である駒塚古墳を凌ぐ規模となる。

外表施設 斑鳩大塚古墳は従来、周溝をもたない古墳と考えられてきた。また、埴輪と葺石の存在は報告されていたが、実態は明らかではなかった。今回の調査では、おもに第1調査区から多量の埴輪片が出土した。さらに、SD01の墳丘側の南端付近で転落石を検出し、埴輪と葺石の存在を再確認した。

駒塚古墳では、葺石は確認されたものの、埴輪の出土量は少なく、墳丘全体に埴輪が樹立されていた可能性は低い。また、確実な周溝は確認されていない（荒木2007、2011）。いっぽう、斑鳩大塚古墳は埴輪、葺石、周溝などの外表施設を完備した首長墳であり、駒塚と斑鳩大塚の間に画期が認識できた。現存する墳丘上には中段に里道が巡り、本来の墳丘は二段築成の可能性が高い。今後は、段築や葺石の様相など、墳丘に関する情報の把握が必要であろう。

出土遺物 出土遺物の中心は埴輪である。埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪は黒斑を有し、外面にはB種ヨコハケを施す。透孔はすべて円形である。これらの特徴から、川西編年のⅢ期に位置づけられる（川西1978）。また、鱗付円筒埴輪が含まれることも明らかになった。埴輪の様相は、石釧や筒形銅器など古墳時代前期の威信財と帯金式甲冑が共伴するという副葬品

の年代観よりも若干新しい印象を受けるが、大きな矛盾をきたすものではない。

形象埴輪の存在も今回の調査で初めて判明した。すべて小片だが、家形埴輪、靱形埴輪、蓋形埴輪と考えられる。墳頂部には一定量の形象埴輪が樹立されていたことが想定される。今後は埴輪の製作技法に関する分析を進め、技術や製品の供給源を明らかにする作業が必要である。

さらに、周溝の埋土からはTK209型式期に位置づけられる須恵器片が複数出土し、周溝の埋没年代が7世紀前葉であることが判明した。北方に藤ノ木古墳が築かれる頃、斑鳩大塚古墳の周溝は埋没しつつあったことを示している。

古代以降の土地利用 周溝の埋没後、古墳の周辺に掘立柱建物が建てられることが判明した。柱穴の近辺で検出した東西溝から平安時代末頃の土師器皿が出土しており、建物造営年代の一端を示している。柱穴には掘形と抜取の区別が明瞭な大型のものも含まれ、建物群の性格の解明が新たな課題として浮上した。

今後の課題 以上のように調査の成果を総括した。墳丘周辺における小規模なトレンチ調査だが、斑鳩大塚古墳の再評価に資する新たな成果を蓄積できた。とくに周溝の確認と埴輪の出土は重要な成果といえよう。

いっぽう、残された課題も多い。なかでも前方部の有無の確認は、斑鳩地域における首長系譜の変動を探るうえで欠かせない情報である。今後の発掘調査で解決したい。

斑鳩大塚古墳の周辺では宅地開発が急速に進展しつつある。遺跡の保存と活用を図るためにも、古墳の範囲の確認は最優先の課題である。

(豊島)

参考文献

- 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会
- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』綜芸舎
- 荒木浩司 2007「駒塚古墳（01－1次）調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13年度（2001）』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳（02－1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2014「戸垣山古墳西側における立会調査出土の埴輪片について」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 泉森 皎編 1977『竜田御坊山古墳群 付 平野塚穴山古墳』奈良県教育委員会
- 伊野近富 1995「土師器皿」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 梅澤あゆみ・清水早織・中村 真・豊島直博 2014「斑鳩大塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第32集 奈良大学文学部文化財学科
- 大庭重信編 2010『難波宮址の研究』第十六 大阪市文化財協会
- 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」犬木 努編『埴輪論考Ⅰ—円筒埴輪を読み解く—』大阪大谷大学博物館
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦・関川尚功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 河村萬里・高左右 裕・豊島直博 2015（刊行予定）「奈良県斑鳩町寺山古墳群測量調査報告」『文化財学報』第33集 奈良大学文学部文化財学科
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄報』第十輯 奈良県教育委員会
- 杉井 健 1992「長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法」都出比呂志・福永伸哉編『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団
- 関川尚功編 1976『斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会
- 高橋克壽 1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 史学研究会
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 中井一夫 1975「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」『青陵』No.27 奈良県立橿原考古学研究所
- 久野邦雄・関川尚功 1976「斑鳩町三井の古墳群について」『青陵』No.31 奈良県立橿原考古学研究所
- 平田政彦 2011「東福寺遺跡（調子丸古墳）（02－1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 藤井利章 1986『奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究』斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄編 1990『斑鳩町の古墳』斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄ほか編 1995『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 前田真由子 2009「製作技法からみた家形埴輪の変遷とその画期—近畿地方出土家形埴輪を中心に—」『古文化談叢』第61集 九州古文化研究会
- 和田一之輔 2013「靱形埴輪の編年と系統」奈良文化財研究所編『文化財学の新天地』吉川弘文館